

76回生丹 BAL スタート！

研究推進部長 丹生 憲一

4月12日（月）～16日（金）は第1学年、76回生のオリエンテーション週間でした。

教科オリエンテーション、集団行動、校歌指導、レクリエーション…というプログラムの中に、「丹 BAL オリエンテーション」も加わり、3回にわたって丹 BAL 1の活動を行いました。

4月13日（火）はSDGs（持続可能な開発目標）を英語と日本語を見比べながら解説し、18番目の目標を考えました。ALTのVaruna先生が登場して、「No poverty（貧困をなくそう）」「Zero hunger（飢餓をゼロに）」…と英語で読み上げると、地球規模の問題に取り組んでいるような空気が醸し出されたから不思議です。14日（水）の2回目は、現2年生の宮野真一君と吉田結さんが、昨年取り組んだ研究内容を発表してくれました。二人が所属した班は、「丹波の人口はなぜ減っているのだろう」という疑問から、若い人たちが進学や就職を機に地元を離れていく現状、それを食い止め、外から移住してくる人たちを増やすためにどんなことが出来るか？を考えています。徳島県の神山町に電話インタビューをし、地域の魅力・取り組みを知ってもらうことが一番大切だと考えたと発表しました。また、後半は「情報の入手方法」として新聞の理由を取り上げ、丹波新聞社さんからいただいた4月8日号・11日号に目を通して、どの記事に地域の魅力を感じたかを話し合いました。16日（金）の3回目は、「アイデアを出し合おう」というテーマで、KJ法を実践してみました。春休みの課題に課されていた「自分達の地域の魅力（小学校で学んだこと、中学校で学んだこと）」を、スマホなどで撮影した写真を見せながら紹介しあい、その中で「私たちのイチオシ」を決めるという内容です。丹波市内の小中学校では、地域のことを学ぶ機会が多いようで、地域ごとに上がってきた内容も様々でした。お互いに知らないことを伝え合いながら、「黒井城」「鐘が坂トンネル」は歴史、「ホトケドジョウ」「カタクリ」は自然…とよく似たものをまとめて、タイトルを付けていくという作業までをしました。21日（水）クラス別に行った最初の授業では、上で話し合ったことを基に、関心のある項目をもとに班分けをするクラス、先に班を決めてからその中で自分達の取り組みたいテーマを考えているクラスに分かれました。次回は引き続き、班別に話し合い関心ある事柄をさらに深く調べていく予定です。



4月20日（火）丹 BAL 台湾

第2学年の丹 BAL 台湾でも、7月13日にオリエンテーションを行い、20日には第1回目の講座がスタートしました。

5月に第1回目のオンライン交流を行うにあたり、事前に自己紹介シートを作り、「部活動」「趣味」「よく聞く曲」「好きなアニメ」などを記入していました。さらに、台湾のことを知っておこうとスマホを使って、食べ物や流行っているアニメなど、共通の話題になりそうなことを探していました。次回も引き続き、交流に向けて準備を進めます。



4月19日（月）総合Ⅲ

第3学年の総合Ⅲでは、「他人を紹介する」ためにクラスメートにインタビューをしました。普段、同じ教室にいて隣に座っていても、意外に知らないことは多いようで、「へえー」と声を上げながらメモを取る姿が多く見られました。好きな食べ物、部活動、ハマっていること…など、質問の内容は多岐にわたっています。これをまとめて、どのように紹介してくれるのか？
次回が楽しみです。



いざ、その戦いに臨もうではないか！（Roger C.Shank）（2） 高松 昭彦

旧春日町大路小学校で教鞭をとった小西健二郎「学級革命」（初版 1955・毎日出版文化賞）は、丹念に丹波弁の子どもを記述しました。すぐれた学習研究理論の報告書には、職人的な細かい積み重ねの厚い記述があります。彼の現場は、東京の文部省にあったものではありません。特別な授業を、特別な生徒と先生で、特別な時間で実践したのでもありません。日々の営みを、丁寧繊細謙虚に観察し、参与改革することが、どれほど効果的で持続的で困難な改革かは、多くの教師が知っています。かつて訪れた、そうした教師のいる改革を進める学校では、どれ一つとして同じ教室はありませんでした。ただ一つ共通するのは、教師も生徒も課題に挑戦し、より良い教授法ではなく、学びを育てるやわらかな空間が存在していたことです。専門家が選定した、特定の教材に固執して、子どもたちを教材の下僕にするのではなく、子どもたちのだれもが好きになれるような、それぞれの子どものみに独自の愛される数学を作る方法、愛される学習とは何なのかが探究されていました。そこには端正で謙虚で豊かな学びの作法が自然に派生していきます。多様性に関われ理念が共有されています。

1990年代後半から2000年初頭にかけて、全米各地では困難な中、こうした挑戦が続けられ、論文発表され、遅れて日本では2009年に研究者たちが集まり、これを翻訳しまとまった書籍として出版しました。そのエピローグには次のような言葉があります。

「教育が勝者と敗者を生み出す限り、私たちは意味ある変革を行うことはできないだろう。学校が競争の場としてみられる限りその勝敗ゲームからは何も学ばない、ゲームの上手なプレイヤーを育てていることになる。教育における真の変革のためには、教育研究以上のものが求められている。それはいますでにそこで起きている戦いなのである。いざ、その戦いに臨もうではないか！」（Roger C.Shank）

「学習科学ハンドブック R.K.ソーヤー編 森敏昭 秋田喜代美 監訳 2009 培風館」

多くの教育研究書で、自らの実践を理論的に後付け激励する言葉に出会うとき、鮮烈な発見と、教育研究以上のものを生み出す戦いに臨むことは、容易ではないにしろ無駄ではなことに気づきます。その戦列の励ましに加わり、みなさんとともに「いざその戦いに臨もう」ではありませんか。